



会期：令和6年9月7日（土）～29日（日）
会場：久留米市美術館 1階ギャラリー

筑後川中流域は江戸時代、藍染めに使用する「藍」の栽培が盛んな地域として知られていました。

久留米藩の藍生産や藍染めは、初代藩主有馬豊氏の入国以来、藩領内各地で営まれました。この地に根付いた藍染めの文化は、江戸後期に久留米紺という高品質な染織工芸品が生まれる素地をつくったのです。

久留米紺は、綿糸を素材とし、緻密な計算のもと、柄になる部分を糸の段階で染め分けてから織り上げる「先染めの綿織物」です。数多くの工程を経て高度な技術で制作され、その伝統的な技術は国の重要無形文化財に指定されています。

展示会では、現在は途絶えてしまった筑後の藍に関する資料、井上伝によって創始された久留米紺の歴史、伝統の技を支える道具の展示に加え、同会場で公益財団法人久留米紺技術保存会の重要無形文化財久留米紺作品展「藍と白」も開催され、明治時代から現代にかけての久留米紺作品の展示、卓越した技の記録映像の上映、技術保持者等による機織りの実演が行われました。更に、美術館2階で開催された様々な藍染めをテーマにした展示「藍



機織りの実演に見入る来場者

のものがたり」とあわせて、藍染めの文化についての理解を深めていただき、期間中はまさに「藍色に染まる久留米の秋」となりました。

来場者アンケートでは、回答者の96%の方が「満足」「やや満足」であったと回答があり、改めて久留米紺をはじめとした藍染めの魅力の大きさを感ずる展示となりました。

●来場者の声（アンケートより）

「紺の魅力をよく知れた」

「久留米だからこそその展示。とても美しく丁寧な展示に感動」